時評

受け止めてくれる詩型

黒岩剛仁

東日本大震災から二か月近くが過ぎた。今、ゴールデンウィークの真っ只中だが、被災地の方々はどのような日々を送っているのだろうか。激しい揺れに戦きつつも被災を免れた私は、せめて様々に想像力を働かせながら日々を送らねば、と思う。

若干時が経ってしまった文章なのだが、三月二十八日付け朝日新聞朝刊の「短歌時評」で、「今、何を、どううたうか」と題し、田中槐が次のように記していた。

三月十一日の東日本大震災で、わたしも生まれて初めての恐怖を感じた。まさに「かけがえのない私の経験」だった。直接被災したかどうかにかかわらず、多くのひとがそう感じているだろう。だが、今、その「かけがえのなさ」をうたうべきだとは思えないのだ。

その理由として、田中は「それらの多くが、ただの〈類型〉作品の群れになることは、短歌にとり最上とは思えない」と述べる。

しかしながら、私は、苦しくても辛くても、いや、辛いときだからこそ、大いに歌いましょうよ、と言いたい。短歌とは、それをしっかりと受け止めてくれる詩型だと考えている。〈類型〉、結構じゃないか。自らの生み出した作品が結果として〈類型〉に過ぎなかったのかどうか、それは信頼すべき読者が、そして短歌史がいずれ判断してくれる。

確かに、原爆被爆から十年の沈黙を経て、あの絶唱を生み出した竹山広の例もある。だが、竹山の場合は、「心の花」の創刊一〇〇年記念号（平成十年六月）の小論でも述べたように、自らの戦時歌に関する思いもあったわけで、作歌への葛藤は常にあったと思うのだ（そうでなければ、あれほどの作品は生み出せない）。

・袋縫う仕事もありてボランティア骨入れるためと聞けばたじろぐ　奥原百合子

・かなしきはこわれたものの写真より震災前のきれいな町なみ　有田　裕子

・黙黙と環七歩く群にいて家路辿れる事の幸福　森永　恒宏

この三首は、朝日新聞が緊急募集した「東日本大震災を詠む」に寄せられた作品から、朝日歌壇選者が選んで掲載された（四月十八日朝刊）歌の一部である。記されている住所からしても、直接的な被災者ではないようだが、当日帰宅難民となった人、ボランティア活動に精を出している人、新聞か週刊誌などで写真を見ている人、それぞれが今しか詠めない歌を詠んでいる。

プロの（？）歌人たちもそうだ。

・磔刑のごとく身を反る列島を　ことしの桜　咲きのぼりゆく　岡野　弘彦

・日本に来て日本の地震に揺れておりレンブラントの自画像と犬　佐佐木幸綱

・原発は人を養ひ、しかすがに燃ゆる火芯は人を蔑すも　高野　公彦

「短歌研究」五月号より。私も、私なりの七首で参加した。